

昭和三年三月

第一回出身者送行・補充採決。

昭和三年六月

学院を基礎に、弘く道学を興す

べき要求に応じ、金雞会館設立の議成り、先ず和田彦次郎氏為に私財を投じ、酒井忠正伯地を供し、池田清、江口定條、鶴見左吉雄、町田辰次郎、赤池漢、関谷貞三郎、東方壽諸氏、大に協力して同園内金雞池畔に起工。

同年十月二十八日

会館竣工。開館式挙行

同年十一月十日

御大典の日、会館の完成を機に金雞会を組織。会長和田彦次郎氏。

昭和四年一月二十一日

学院は文教革新会を開き、深い省悟から村治村塾主義の第一歩たる農場を開くことを敬告す。

同年三月二十四日

第二回出身者送行・補充採決。

同年十月二十三日

学校設立の法規の研究を始む。

昭和五年三月二十一日

第三回出身者送行・補充採決。

同年三月

学校設立発起人会を開き、校名

観音の丘陵と相対し風光明媚の勝地とす。

面積 山林田畠合せて二十町歩余。

目的 学院の道業に資し、自治の風を興すを目的とす。

日本農士学校（沿革S.5.3 学校設立発起 S.6.4 開校 S.6.5 開校記念式挙行）所在

菅谷の荘の内。

趣旨

人間に取つて教育ほど大切なものはないことはいふまでもない。国家の運命も国民の教育の裡に存すると古人も説いている。真に人を救い世を正すには、結局教育に須たねばならぬ。然るにその大切な教育は今日如何なる有様であろうか。

今日の青年は社会的には悪感化を受けるばかりで、其の上に殆ど家庭教育は廢れ、学校教育は學校に限られて居る有様である。そして一般父兄は社会的風潮である物質主義功利主義に知らず識らず感染して、只管子弟の物質的成功、否最早今日となつては卑屈な給料取たらしめんことを目的に（実は今日それも至難になつてきて居る）及び隣人への虚栄から力を竭して子弟を學校に通わせる。その群集する子弟を迎えて學校は粗悪な工場と化し、教師は支配人や技師、甚しきは労働者の如く、生徒は粗製濫造された商品と化し、師弟の道などは亡び、学科も支離滅裂となり、學校全体に何の精神も規律も認められなくなり、その為青年子弟は、何の理想もなく、卑屈に陥り、狡猾になり、贅沢遊惰に流れ、義理人情を弁えず、學問や道に対する敬虔の念を失ひ、男兒に雄渾な國家的精神無く、女子に純淑な智慧徳操が欠けてしまつた。これで我等民族、我等の國家は明日どうなるであらうか。

更に一層深く考えると、なまなか文化が爛熟して、人間に燃える様な理想と之に伴う奮闘努力とが消滅し、低級な享樂と卑怯な苟安とを貪つて、四の五の言う様になつてしまつと、かゝる階級は救済不可能なるを常とする。平安の公卿達も江戸の旗本御家人共もかくして滅んだ。匡房も嘆じ、吉宗も定信も焦つたが、終に如何とも出来なかつた。かゝる時國家の新生命を發揚した者は、必ず頽

を日本農士学校と決定。発起人―酒井忠正・安岡正篤・東方 籌・菅原兵治・野口静雄・瀬下武松・渡辺敏夫・伊藤角一（吉田友廣）席上、菅原を檢校、野口を学生監、瀬下を農場長（農務主任）、渡辺を研究主任、伊藤を教務主任、主事長を菅谷莊司、瀬下を同副莊司と予定し、各其の職責に応じて研究をなさしむることとした。

同年四月―五月

東方主事長、恰好の地を相すべく実地踏査を開始。先ず埼玉県所沢、東京府南多摩郡及び八王子日野台、府立農林学校附近、五月埼玉県入間郡、東京府烏山、下高井戸等踏査。恰好の地得られず。

同年五月十五日

府下七生村百草地区を踏査、恰好の地として交渉したが、建値決定について折合わず交渉中止す。

同年七月十三日

埼玉県比企郡松山古城趾及び吉見百穴附近を踏査、共に適せず。転じて菅谷村東昌寺高地を偵察断念、遠山越高地向い東方を瞰下し城趾の重忠像に心動かされ山を下り、菅谷の莊を発見す。十六日再び精査し、学徒指導に資すべき要機備わるを認め買収に着手す。

学業

一、正徳学科

- (イ) 日本精神及国体の究明
- (ロ) 東洋先哲の学の参究
- (ハ) 農村開拓の偉人研究
- (ニ) 東西自然詩人の人物作品研究
- (ホ) 他国民精神究明の爲の外国偉人研究
- (ヘ) 時事解説並に批判
- (ト) 習字、武道及士氣を涵養振すべき音楽

二、利用学科

農芸一般に関する諸知識及び公民としての教養。

実習

- (イ) 作物
- (ロ) 園芸

廢文化の中毒を受けずに純潔な生活と確乎たる信念とを持つた質樸剛健な田舎武士である。今日も真底の道理に変化はない。この都会に群る学生に対して今日のような教育を施して何になるうか。国家の明日、人民の永福を考える人々は、是非とも活眼を地方農村に放つて、此処に信仰あり、哲学あり、詩情あつて、而して鋤鋤を手にしつゝ毅然として中央を睥睨し、周章ず、騷がず、身を修め、家を斉え、余力あらば先ずその町村からして小独立国家にいたであつていこうという士豪や篤農や郷先生を造つていかねばならぬ。是れ新自治（面白く言えば新封建）主義とも謂うべき真の日本振興策である。

金雞学院開設以来四年我々は一面思を此処に潜めて、地方農村の先覚者、重鎮的人物たるには如何なる学問教養勤勞を励むべきかを研究し、その間更に我々の微志は日本の柱石たるべき国士の方々の熱誠な共鳴賛助をも得ることが出来たので、漸く茲に地を卜して日本農士学校を興し、平生の志の実現に一層努力する所以である。

日本農士学校

昭和六年度(第一期)

四月十一日

日本農士学校学生相見式—午前八時院長學監主事長菅原校より訓辭。それより金雞祠堂に參詣、正午食堂にて會食。農士学校生は明治神宮參拜、其後菅谷へ入莊。

四月十二日

寮の表で入学式。朝食後田圃の見廻り、仲々広い、荒れた土地なのに驚く、帰りに新道の両側に入學記念の桜の苗を植えた。

四月十三日

本日より講義拜聴。菅原先生の「學道箴規十則」。昼食後柿苗植。

四月十六日

講義後トラック一台つく(書物と食物積載)二時半頃、安岡先生が見えられた。(食物の悪いことを聞かれて視察にこられた由)。

四月二十二日

重忠公の祭日—重忠祠廟に參拜。歸校すると、學寮は人をついて埋っている(村人の學寮見物)。

四月二十七日

本日より五月一日迄、生徒一同檢校始め教授諸氏に引率され、金雞學院に見學講習。在館中毎朝安

農士学校の創立—安岡正篤『農士道』序

生物進化の跡を木に譬えるならば、人類の生活はまさしくその繁茂でありその文明は花とも実とも称することが出来るであらう。然しながら人間が漸く自然を離れるに随つて生命の衰退を招き、文明の榮華の裡に滅亡の影の濃くなりゆくことを深省せねばならぬ。…歴史は文明衰亡史であり、それは先ず都市に於て化膿する致命的膿物を発見することを常とする。文明都市は実に素朴健全な農村生命を榮養として發育し、誤つて之を酸敗せしめるのである。

…農村を如何に健全にし、天真を發揮せしめるかは、実に國家永遠の根元問題である。…余は昭和の初、一世を挙つて都市商工文明を謳歌し、農村は亡びゆくもの、時代に取り残されたるもの、國家發展に最早積極的効用の無いものとして閉却され、或は蔑視され…荒れ果てたとき、久しい深念の果に微力ながら…農士の善成を謀つて、畠山重忠館跡菅谷の莊に日本農士学校を創立した。

広く山沢の健児を募る—日本農士学校第一回學生募集(S.6.3.1發行 金雞會報所載)

かねて前會報を以て申上候趣旨の下に、學院の一道業として屯田式教學を来る四月より菅谷の莊に於て興すことと相成、広く天下に有為の青年を求め候處、意外に大いなる反響有之全國各地より問合せや入学願書を送り来るものありて、愈々道業の任重大なるを覚え申候。なお左記事項(募集要項)御參考の上、新日本を双肩に担うべき篤実なる青年を御推挙被下度願上候。

菅谷林中の學堂より(日本農士学校開創の挨拶 S.4.28紙上発表)

菅原兵治

私共は、かねて計畫中の菅谷の莊に入り、愈々日本農士学校の經營に參ずることになりました。職員は、三月末から入莊して、いろ／＼準備して居りましたが、學生も愈々十一日から入学したので、此の林中の學堂に急に生氣が漲つて、土といわず、人といわず、殿堂といわず、禽獸といわず、草木といわず、まさに入魂されたかの感で生々して居ります。私共は、これからこの道場を經營して参りますに當つて、同人諸彦に一応の御挨拶を申述べたいと思います。

思うに、この菅谷莊中の日本農士学校の創立は、正しく天の時、地の利、人の和の天地人三才の力が翕然として相待つて然らしめたものというべきであります。この三才の内容に就きての細述は

岡学監の国体論講義あり。其の他
酒井院長、吉田協調会常務理事、
後藤日本青年館理事長、町田協調
会労働課長、雑賀政教社主筆諸氏
の講義あり。

五月二日

本日坂下農場水田苗代作り。

五月八日

畜舎北道路新開。昼食前に学院
生トラックで布団を持って来た。

五月十日

開荘・開校記念式。―別掲―

五月十六日

貯水池の水が連日來の雨で大変
たまり、新築の土手を圧し南側の
半分が口をあけた。センを抜き、
水も減少したので引き上げた。

五月十七日

本日休日。朝食終了間もなくけ
たたましい半鐘。火事は菅谷で、
皆農道着に着更へかけつけてみる
とポンプは一台、そのポンプを一
所懸命あはった。火事が終り帰る
頃、他村の消防夫が来た。寮に
帰ってしばらく眠った。夕方村の
者が、礼に来たとの事。

五月十九日

長野県より和田豊作氏を招いて
稲作に関する特別講義を聴く。

五月二十四日

之を略しますが先ず私共は、この遇い難き三才の徳に報ずるの心を深く且つ毅く抱くものであります。
私共はこの林中に於て、何よりも先ず第一に、私共自身謙虚なる金雞学徒として、金雞行者として、
知行合一、学業不二の修道をすることを忘れぬつもりであります。此の学林に参集する学子を薫陶す
る第一義力はこゝにあると信じます。そして真に国基たる農村を自治振興せしむるに足る人物を教養
することを期するものであります。

今や、農村振興の声は高く、社会改造の叫びは轟しい。然しその多くは何れも枝葉末節の方術のみ
に狂奔して、深く本を培うことを忘れ勝であります。此処に於ては努めて、人物の根本を培います。学
問といわず、知識といわず、技術といわず、それら一切の根本力たる第一義力の上に根ざすことを忘
れぬつもりであります。従つて器用な小才子は出ないであらう。但し私共は次の一句を捻ずる
者であります。「農者国之本也。抱朴含真以培此大本」

斯人にして始めて国家維新、社稷振興の源泉たり得ると信じます。

最後に、松下村塾の学風を偲びたいと思います。松陰が藩都萩の郊外陋村松下村に松下村塾を開い
て、若き青年と共に道を修めたのは何故か。藩都萩には藩立の高等教育機関たる明倫館があるにも拘
らず、何故に態態陋村松下村に学塾を起せしか。それは都門に学び得ない青年にまにあわせた教育を施
さんとするお情け的教育機関では断じてない。幕末の既成教育機関では既に為し得なくなった教育の
本質を此処に培つて英靈漢を打成せんが為であつたと見るべきであります。松陰の語を以ていえば、
「やむにやまれぬ大和魂」の迸る処、「松下雖陋村、誓為神国幹」がためであつたのであつて、これ実
に松下村塾の教育理想であつたのであります。

吾々の菅谷林中の学堂、亦此の理想が存せねばならぬと思つて居ります。不遜の言かも知れませぬ
けれども「菅谷雖陋村、誓為神国幹」これが吾に対つて敬肅に誓う私共の覚悟であります。（此の道業
の性質上、実は「神国幹」というよりは「神国根」といいたい。）

私共は、深く不才を愧じつゝも、この道業の固成に當るわけであります。何卒同人諸彦の御鞭撻を
賜わり、大成を期したいと念ずる次第であります。開創に當り当校一同に代つて御挨拶致します。

※当校一同―昭和六年度職員 検校菅原兵治、学生監野口静雄、農場長瀬下武松、研究主任渡辺敏夫、
教務主任伊藤角一（九州農士学校学監拝命後は渡辺研究主任が兼任）、司計菅原茂次郎。

御講話、四時当校より寄附の千手堂の撞初式に一同参列、学監鐘名を曉鐘と名づける。

二月十二日

学生を四班に分ち修学旅行実施。

一班 栃木茨城千葉三県地方

二班 静岡愛知三重三県地方

以上十二日—十六日(五日間)

三班 静岡愛知長野山梨地方

四班 福島山形宮城三県地方

以上十八日—二十二日(五日間)

二月二十六日

東京に兵変—二・二六事件。

二月二十七日

時局騒然の中、講堂に静座先般の旅行の報告会を開く。

三月三日

酒井院長、安岡学監と協議して

創業十年の経過概要発表。—別掲

三月九日

学監来荘、陸軍将校の叛乱事件及び前後の政局につき御話あり。

*翌日時務達原書後に題すを記す。

三月二十八日

本校第四回(五期)卒業式は、東洋思想研究所開創十五年、金雞学院創立十年、日本農士学校開校五周年並に金雞叢刊百冊の記念式典に金雞学寮の卒業式を兼ねて午前十時より会館大講堂に於て挙行。

第四回卒業式 告辞(S11.3.28第五期卒業式)

茲ニ卒業生諸君ノ行ヲ送ルニ臨ミ、道ヲ思イ時ヲ思ウテ聊カ復タ婆言ヲ述ブ。

安岡正篤

諸君ノ学ハ何ノ学ゾヤ。

世ノ学者道ニ於テ管中ヨリ天ヲ窺フカ如シ、少シク所見アレハ輒チ門戸ヲ立テ相争イ、大人ヲ非笑シ先賢ヲ輕議シ畜ニ世道人心ニ益ナキノミナラス、又甚タ害アリト為ス。諸君ハ我カ性ニ率ウテ敦ク先賢ニ学ヒ、己ヲ空シウシテ大人ニ聞キ、苟ニ合ウヲ求メス故ラニ異ヲ立テス、心ヲ安ンシ命ヲ立テ、人ヲ愛シ物ヲ開キ、分ニ応シテ奉公ノ誠ヲ尽スベシ、諸君ノ学ハ仁ノ学ナリ。畏クモ 皇室ニ於カセラレテハ皇王ノ御名ニ仁ノ字ヲ命シ給ウ。万物生成化育ヲ旨トシ給ウ大御心ナリ、斯ノ道ヲ翼賛シ奉ル所以ヲ体究スルコト仁学ノ真髓ナリ。曲学阿世ノ徒トナルコト勿レ。

諸君ノ時ハ如何ノ時ゾヤ。

時務ヲ識ルハ俊傑ノ士ニアリ。今ヤ我カ国運ハ旭日天ニ冲セントスルガ如シ。然ルニコノ国運ニ乗ジ 皇謨ヲ翼賛スベキ人材ハ其ノ影ヲ潜メ、民心帰嚮スル所無ク、上下相瀆シ廉恥風破シ、毀譽真ヲ乱リ直言聞カレズ、実ニ憂憤スベシ。然レドモ諸君ハ器度ヲ大ニシテ一時ノ治乱ニ拘ワラズ、能ク大局ヲ達觀シテ深潜嚴毅、潜行密用セヨ。

諸君ノ任ハ如何ノ任ゾヤ。

天道ハ万物ヲ生成化育ス、政道ハ一夫モ其ノ所ヲ得ザルモノナカラシムルヲ旨トス。国家ハ一人一党ノ私スベキニ非ズ。皇運ハ万民ソノ器ニ応ジテ之ヲ翼賛スベキナリ。普天ノ下率土ノ浜、何ノ処ニ在リテカ皇国ニ報ユルヲ得ザランヤ。且ツ功名ノ地ハ久シク処ルコト難ク、富貴ノ人ハ其ノ志ヲ損シ易シ、諸君ハ一時ノ顯榮ヲ欲スルコトナク、常ニ万世ノ為ニ太平ヲ開クベキ真誠ノ事ニ当リ、知ラレズシテ慍ラス、無名ニシテ有力ナル人物タランコトヲ本懐トスベシ。

終ニ天神地祇ニ祈ツテ諸君ノ健安ヲ望ム。

昭和十一年三月二十八日

※昭和十年度職員—檢校菅原兵治、教授駒田孝義、同渡辺敏夫、助教江渡清治、主事後藤長志、補導綱川哲夫(教務助手)、同近重政人、同柳橋由雄、同倉島加賀平(以上三名—農場助手)

名研学、夜七時より相見式。

二月十二日

修学旅行。本日より五日間、五班に分ち、東北・北関東・南関東・信越・東海各地方に向う。

三月十五日

朝香宮殿下御台臨。午後一時半、玄関前に堵列する職員、学生、卒業生の敬礼を受けられ御到着、直ちに松籟軒に御入り遊ばさる。そこで院長、学監、検校より金雞学院道業に付き言上申上げた。

それから院長の御先導で学寮内を御一覽、講堂の論語講義、道場の大月流武道に御足を止められ、恩賜文庫から神社に詣らせらる。その間に学生は農道着に着換え農仕事を御目に懸けた。その後再び松籟軒で御小憩。三時十五分玄関にお出まし整列する学生の直前五米まで御歩を進め直立し給ふ。かくて御予定を二十分近くも延期され三時十八分、御帰還遊ばされた。

三月十六日

八時より学監最後の御講義。

三月二十一日

卒業式。十時より挙式、終って神社に奉告参拝、記念撮影、それより来賓と共に送別午餐会に打寛いで、一時過ぎ散会した。

とするものであります。かるが故に農村生活に即して日本的士道に参究せんとする当校に於ては、生活様式一切を努めて純日本的に斉整せんことを期して居る次第であります。

第六、学生の実際訓練に当つては、之を数箇の家族に編制し、学寮生活及農場経営に涉つて、各家族毎に自治的に之に当らしめて居ります。農場の勤労は、日本臣民として社稷への奉仕を通じて、忠誠を至尊に致し奉る農道尽忠の信念を以て、仕事にいそしみつゝ、ある次第であります。

最近邦家の情勢は愈々農村の国家的使命を重大ならしめ、特に人材の欠乏を深憂すべき今日に於ては、古今興亡の歴史より見まして、国家の明日を担当すべき人物を山沢の間に崛起せしむることの甚だ緊要なるを痛感しつゝ、あるのであります。然るに、畏くも本日かゝる僻遠の山中の当校に、

殿下の御台臨を仰ぎましたことは、一同誠に恐懼感激に堪えず、一層此の道業の素念貫徹に精励せんことを深く覚悟致すものであります。

以上、敬んで当校の概況を言上申上ぐる次第であります。

卒業式告辞 (S 12. 3. 21 第五回卒業式—第六期生)

時維レ昭和十二年三月二十一日、菅谷ノ莊ニ於テ日本農士学校卒業生送行ノ式ヲ挙グ。去春相見ヨリノ道縁ヲ懷ウテ豈ニ感歎無キヲ得ンヤ。

諸子ヨ、諸子ハ都門ノ輕薄兒ニ非ズシテ、実ニ山沢ノ健兒ナリ、從來ノ砥礪ハ諸子ヲシテ世間ノ流行ヲ逐ワシメズ、能ク国家正氣ノ鍾マル処タラシメント欲シテナリ。諸子夫レ浮雲ノ富貴ヲ度外ニ付シ、肱ヲ曲ゲテ枕トナスモ、樂ヲ其ノ中ニ有スル人トナルベシ。

諸子ヨ、道ヲ学ブ者ハ往々偽善ニ陥リ、意氣ヲ喪イ、或ハ又奇矯ニ走り、頑固ニ偏ス。諸子学問ハ哲人ノ如カランモ、淳朴ハ農夫ノ如クニシテ可ナリ。

諸子ヨ、一國ノ士タラント欲スレバ、能ク一郷ノ士トナルベシ。一郷ノ士タランニハ、能ク一家ノ善男子タルベシ。僮僕モ其ノ恩ヲ称シテ始メテ共ニ道ヲ語ルヲ得ン。

諸子ヨ、今日正ニ相別ル。一河ノ流、一樹ノ蔭、亦是レ他生ノ縁ト云ヘリ。況ンヤ寢食ヲ共ニシテ、齊シク聖賢ノ学ニ参ゼシ者ニ於テヤ。諸子ノ為ニ天地神明ニ祈ツテ健安ヲ維レ望ム、諸子亦珍重自愛セヨ。

敬 白

安 岡 正 篤